

～IPM（天敵農法）から IBM（生物多様性管理）へ～
「農産物の安心安全を生きものの視点から見つめなおす！」という
テーマでの講演会を行いました。

講師は静岡県の桐谷圭治さんと愛媛県の長尾見二さん。
参加者は一般の生産者や消費者の他に、高知大学農学部先生や学生さん、農業高校の生徒さんや先生、それに行政サイドからも環境農業推進課や普及員さんも参加され、会場は160名ほどで一杯になりました。

桐谷さんは一貫して農地に住む生物と「共存」する農業＝IBM〔総合的生物多様性管理〕を提唱されてきました。1970年頃には、高知県にあった農水省農業技術研究機関の研究室長をされていました。

高知県では、特にハウス園芸で“害虫”を“益虫”で抑える IPM（天敵農法）の考えとその実践が盛んですが、桐谷さんは“害虫”“益虫”だけでないそれ以外の沢山の「ただの虫」の存在の大切さを語られました。

“ただの虫”が多様に存在することによって害虫も被害を出すほどの密度にはなれない、そして害虫（もともとは人間がそう呼ぶだけ）そのものを“ただの虫”にしていくような農業生態系をどう作っていくかが、これからの農業の大事なポイントだと。

有機稲作30年の長尾さんは次のように語られました。「私の稲作は生きもの達に手伝ってもらっている。だから田んぼの生きもの達が如何に生活しやすいように環境を整えてあげるかが、田んぼでの自分の仕事だ。」と。そして「農薬を撒く周囲の田んぼではウンカの被害が多発した時も、農薬を撒かない自分の田んぼではその被害が出なかった。」という、まさしくIBM（生物多様性管理）そのままの経験も話ってくれました。

長尾さんは農薬による健康被害を受け、将来的不安を感じる中で一切の農薬・化学肥料の使用を止められました。有機稲作30年のキャリアを持つ今治市の農家です。

有機農業推進法や有機JAS法で市民権を得た有機農業ですが、もう一つ盛り上りに欠け漠然とした行き詰まり感があるのもまた事実です。そんな中、これからの有機農業の一つの方向性を示すものとして、有機農業を語る一つの切り口として、桐谷さんの理論や長尾さんの実践があるように思いました。

余談

桐谷さんは高知の農水省農業技術研究所に1970年を挟んで16年間勤務されました。時あたかも農薬万能全盛時代に疑問を感じ、合成農薬による「消毒」防除から、IPM〔総合的有害生物管理〕を経て、農地に住む生物と「共存」する農業＝IBM〔総合的 생물多様性管理〕を提唱されてきました。

有機塩素系農薬のBHC。この農薬は環境への悪影響が大きすぎるということで現在日本では使用禁止、販売禁止になっていますが、高知から全国に先駆けて1969年4月にBHCの使用禁止が打ち出されたことをご存知でしょうか。

高知在職時代の桐谷さんの功績の一つです。

“目からうろこ”
の一冊です。

桐谷さんの本の紹介



詳細

残留農薬が問題視され、食の安全性を希求する声の高まりとともに減農薬や有機農業がようやく定着しつつある。本書では、20世紀の害虫防除をふりかえり、減農薬・天敵・抵抗性品種などの手段を使って害虫を管理するだけでなく**自然環境の保護・保全までを見据えた21世紀の農業のあり方・手法を解説する。**

第1章 農業の将来(世界の人口、農業、環境;アジアの農業環境と稲作 ほか)

第2章 化学的防除の功罪(化学農薬依存への反省;BHCの環境汚染 ほか)

第3章 有機農業の明暗(自然の加害者から保全者へ;有機農業とは ほか)

第4章 施設栽培の生態学(農業生態系と害虫相;世界3位の施設園芸国 ほか)

第4章 総合的 생물多様性管理(IBM)(生き物を育てる機能;IBMの理論 ほか)